J-J Rousseau の体育思想へのアプローチ

「evaluation of ancient history」の研究を中心として

山　田　岳　志

The approach to J-J Rousseau's thought about physical education.
mostly the study of evaluation of ancient history

Takeshi YAMADA

Jean Jacque Rousseau is not a historian what we call. But we can find everywhere in his works many writing about history. In this case Rousseau thought "written history" and he had to find out educational value in it. This is the reason why Rousseau criticizes modern history and estimates high ancient history and ancient man.

However, ancient history and ancient man do not include the whole ancient age. Rousseau especially estimated Sparta. The admiration of Sparta owes to the matter of morality and education. This became the standard of evaluation in the society of 18th century, and moreover the guide of human and social development.

According to such thinking of Rousseau, this time I'll think especially about Rousseau's evaluation of ancient history. I want to see basing on Rousseau himself's view of history, how Roesseau thought historical fact in the ancient history, and what part the physical education in the Sparta education which Rousseau admired took in the public education.

序

J-J Rousseau (1712—1778) は18世紀フランス史学の主流をなすような歴史家ではない．しかしながら，彼の作品の中には歴史をとりあげたものがあらゆるところに散在しているのである．例えば，「エミール」(Émile ou de l'éducation) において，「人間の心の研究を始めるためには，紀伝体の歴史を読むのがよいと思う．」[(1)]と言っているような，歴史を通して人の教育を試みようとした事実であり，又学問・芸術論 (Diseours-sur les sciences et les arts) において，「われわれの魂は，われわれの学問と芸術が完成に向って前進するにしたがって腐敗した」[(2)]と言うように，学問の発達と徳性の衰退を論じた事実である．J-J Rousseau のこのような歴史的演繹的な論理が歴史叙述であると言えないにしても，彼の作品でとりあげられた歴史的叙述というものは，J-J Rousseau をして「歴史家」ではなかったと断定してしまうには少々疑問が残るであろう．まして18世紀にあって，史学が学問的地位を確立していなかったことも考えあわせると，どのような作品を「歴史著書」と呼ぶのか，又何を「歴史」と見るのかということ自体が十分な目はずをもっていなかったことから——要は歴史意識の問題であろうが，J-J Rousseau の作品の中にも「歴史的著書」とみなされるものがあったと解釈してもなんら不思議のないところであろう．しかしこのようなことが，新しい史学の概念を設定しようとするものでもなければ，又「歴史家」としての J-J Rousseau の justification を強調しようとするものでもない．例え，18世紀フランス史学上に，J-J Rousseau に大きな位置を与えることが不当なものであっても，このことが，J-J Rousseau が歴史をどのように考え，歴史的事実をどのように評価したかということとは別問題であろう．私がここにとりあげるのは，J-J Rousseau 自身が用いた「歴史」というものが，どのような意味をもっているのか，それは「歴史家」としての J-J Rousseau を justification しようとするものでもなく，その「歴史」に対して J-J Rousseau がいかなる批判的見解を示しているか又「歴史的事実」をどのように評価しているか，

というようなそれはあくまでも，J-J Rousseau 自身の「歴史観」に即してテーマへのアプローチを試みようとするものである．

I　J-J Rousseau の歴史概念

さて，J-J Rousseau が「歴史」に対してどのような批判的見解を示しているか，ということを述べたが，それにはまず J-J Rousseau が「歴史」と呼んでいたものが一体何であったかを知ることが先決問題となってくるであろう．「歴史のなかに記されている事実とは，それが実際に起ったそのままの正確な描画であるどころではない．歴史家の頭の中で形がかわりその利害によって型どられ，その偏見の色調をおびる．」[3]，「近代の歴史家はひたすら目立たせることばかりに気つかって，強烈に色彩をつけた人物像を描くことしか考えない．しかもそれは何ものをも表現していないからである．」[4]，これらの言葉が示すように J-J Rousseau が「歴史」と呼んでいるものが一体何であったかが推察されると思う．つまり J-J Rousseau が歴史をとりあげる場合，それは「若い人のために最もわるい歴史家は判断する歴史家であるから，事実！　事実！，そしてかれに自分で判断させる．こうしてかれは人間を知ることを学ぶのである．」[5]（傍点筆者）このことから J-J Rousseau が「歴史」を問題にする場合，歴史叙述は現実のものと一致しなければならない．それは別言すれば歴史の真実を述べることになるのである．しかし，はたして何が真実であることを決定するのであろうか．歴史のなかに記されている事実を，それが実際に起ったことを正確に伝えることは非常に困難であろう．「ある出来事をその経過のままに見るために，読者をその舞台の場所に正しくつれていくことのできる者は誰であろうか？　無知や不公平がすべてを変形する．歴史上の目立つ点だけは変えなくても，それに関係のある諸状況を広げたりちぢめたりして，なんと異なった様相を与えることができることであろう！」[5]．J-J Rousseau においても歴史的事実を決定することは容易にできないことを述べるにとどまっているのであるが，このような歴史的事実認識への疑問は，J-J Rousseau を事実の選択の問題へとすすませるのである．「歴史は一般に欠陥がある．それは歴史は眼に見える目立つ事実や，名辞や，場所や，日時によって定着させうることしか記録せず，その事実の緩慢な漸進的な原因，それを同様にきめることができないようなことは，つねに未知のままになるからである．」[7]，だから歴史上にあらわれる人物は「一定の選ばれた瞬間において，また儀式の衣裳をまとっている時にしか把握されないのである．」[8]（傍点筆者）これは当時の歴史叙述に対する J-J Rousseau の批判であり，又彼がいかに徹底した歴史非真論を述べているかをうかがうことが出来る．「歴史の大きな欠点の一つは，人間を，その善良な点よりもその悪い面からいっそう多くの描写をすることである．歴史は，革命や大事件があるかぎりおもしろいけれども，平和な政治の平穏のうちに，ある国民が繁殖し栄えている間は，それについては何も語らない．」[9] 歴史が語りかけるのは「その国がもはや自分だけでは事たりずに隣国の事件に干渉したとか，あるいは自国の事件にさせたとかいう場合にはじめて記述しはじめる」[10]時であり，「歴史は一国民がすでに衰えかけているのでなければ有名にしない」[11]．J-J Rousseau が「歴史家の真の典型」[12]，といっているほどのトゥキュディデスでさえ，「不幸なことに，かれはいつも戦争について語る，その記述の中には，最も教訓的でない世間のこと，すなわち戦闘のこと以外はほとんどみられない，」[13]と言っているのである．さて，J-J Rousseau が「歴史」について論じているその「歴史」とは歴史叙述のことであり，J-J Rousseau が「歴史」をとりあげるのは「哲学の教訓がなくとも歴史によって，かれは人間の心を見ぬくことができるであろう．」[14]（傍点筆者）というように教育的観点からであった．それは J-J Rousseau にとって「歴史」が人間の心を知るのに最も有効であると考えていたからであった．このようなことから考えられることは J-J Rousseau の歴史意識がまず「事実」を正確に伝えることが必要であるとして，「事実尊重」を強調する立場をとっていたことである．しかもこのような歴史解釈問題は，とりもなおさず現実の問題解決の鍵であったろうし，J-J Rousseau の「歴史観」の著しい特色が「事実尊重」にあったことは現実の問題処理の手段として，また教育的価値として，「歴史」の有用性を認めたことにほかならないのである．

II　古代史評価の問題

J-J Rousseau の「歴史観」なるものが，もっぱら「書かれた歴史」にあったことは上述の通りであるが，では一体彼が問題にしている歴史叙述は具体的にはどのようなものであったのだろうか．「色彩をつけた人物を描くことしか考えなかった．」[15]（傍点筆者）という J-J Rousseau がいうように，近代歴史家への批判はそこに何ら教訓的なものも見出されなかったことが，J-J Rousseau にしてみれば「悪い歴史」であることになるのであるが，これに対して「歴史の真の典型」[16]と言われたトゥキュディデスをはじめ，古代の「歴史家」は高く評価された．それは近代の歴史家に「もはや特長」がなく，それを通して人を教育していくだけの価値が見出されなかったのに対して，「概して古代人は人物像を少ししか描かず，その判断には才気は乏しいが多くの良識を働かせて

いた.」[17]（傍点筆者）ことが「歴史を通して人の心を見る」のに価値があったのである．つまりそこに人を教育するための標本的役割が見出せたのである．古代史，古代人の尊重，これは J-J Rousseau に言えることである．それでは J-J Rousseau にとって，古代史にみられる教育的価値なるものがどのようなものであったのだろうか．「きわめて偉大な徳，ことに彼らの純粋さのまちがいのない兆である習俗のきびしさ，誠実，款待，正義……他のすべての悪の実りゆたかな母である放蕩に対する非常な嫌悪」[18]，つまり古代人には徳が尊ばれていたが，「生活の便宜が増し，芸術が完成され奢侈がひろがっていく」[19]あいだに，18世紀の人々の間には徳が衰えていった．このように J-J Rousseau が古代人，古代史を賛美するのは，彼が考えていた理想的社会，理想的市民が，それらに近いものであったにほかならないのである．しかし J-J Rousseau が古代史，古代人を高く評価したといっても，その「古代」というものが古代全体を意味するものではない．「ギリシアを見ていただきたい．かってそこには，人々はトロイアを前にして，またひとたびは自分の郷土において，二度もアジアに打ち勝った英雄たちが住んでいた．生まれたばかりの文学は，まだそこの住民たちの心に腐敗をもたらしはしなかった．」[20]，「ギリシアの古代諸国家は，その制度の大部分のうちに輝いていたあの知恵によって，その市民に対して，身体を衰えさせ，腐敗させて，たちまち魂の活気を萎靡させてしまうような，静かな，屋内の職業を全て禁じていた．」[21]このように J-J Rousseau が考えていた古代史，古代人というものは，初期ギリシアの徳を備えていた人間にこそあったのである．しかし芸術の進歩は「自分の同国人の美徳を誘惑し，その勇気を柔軟にしてしまった．」[22]（傍点筆者）ばかりでなく，アテネにおいては「雄弁家と哲学者の祖国」[23]となり，「そこにはいたるところに巧妙きわまる名匠の手によって生気を吹き込まれた大理石像や画布が見られた．やがてすべての腐敗した時代の模範」[24]となり，ミューズの所在地と化したと同時に学問と芸術の発達は悪徳を生み，「マケドニア人による支配という桎梏が相次いで起った．」[25]．このようなアテネへの非難と同様にローマ後期へも J-J Rousseau の批判は向けられた．「一人の牧人によって建設され，農夫によって有名となったローマ」[26]が衰頽しはじめたのは，オヴィディウス，カトウルス，マルティアリスなどの出現によってであった．それまで「ローマ人は徳を実践することで満足していた．」[27]がそれ以来正しい人は姿を消してしまったのである．かっての「美徳の殿堂」[28]であったローマも「奢侈と芸術が柔軟にしてしまった身体に生気をよみがえらすことはできなかった．」[29]．このようなアテネ，後期ローマへの J-J Rousseau の非難は彼の作品のいたるところに散在しているのであるが，しかしながらこうしたアテネ，後期のローマへの非難にもまして，スパルタへの賛美は，J-J Rousseau の作品のいたるところに散在しているのである．「賢明な法ばかりでなく，その幸福な無知によっても有名だったあの都市，人間というよりもむしろ半神――それほどその美徳が人間ばなれしているように思われた人々――からなる共和国が起ったのは，まさにギリシアの内部であったことを忘れられようか．ああスパルタ」[30]このようなスパルタへの J-J Rousseau の賛美はなおもくりかえし続けられる．「ラケダイモンの画面は，ギリシアのそれと（傍点筆者）比べると輝かしいとは言えない．他の国民は言っていた，『ここでは，人々は生まれつき徳高く，国の空気さえも美徳をふきこむようにみえる．』この国の住民については，彼らの英雄的な行動の記憶しかわれわれに残っていない．」[31]スパルタこそは全ギリシアが腐敗し，奴隷状態にあった時もなお徳が存在し，自由であった．J-J Rousseau にとっては，「徳によって支えられた国」スパルタこそ理想国であった．

Ⅲ 原始崇拝と徳

このような J-J Rousseau のスパルタ賛美がどこからきたのであろうか．その一つの源泉が社会的道徳にこそあったろうと思われる．「人間をとおして社会を研究し，社会を通して人間を研究する」[32]ことが，学問と芸術によって dry rot の状態にあった現代人の回復をはかるためにも，J-J Rousseau にとっては古代史，古代人，特にスパルタの例をあげて説明する必要があったのである．学問とか芸術は確かに人間に対して気晴しを与えてくれるものだろう．いやそれ以上の価値があるのかも知れない．しかし人間に対しては，学問と芸術は第二義的存在であるべきものでなければならない．しかし，18世紀のそれは不幸にも第一義的存在と化してしまったのである．それが18世紀の社会においては，「文学，芸術は人々がつながれている鉄鎖の上に花飾りをひろげ，彼らがそのためにこそ生まれたと思われるあの根源的自由の感情を押し殺し，彼らにその奴隷状態を好ませる」[33]ように仕向ける羽目になっていったのである．学問と芸術の第一義的存在からくる最も害悪なものは，それが人間の第一義的なもの――人間の内面的なものまで奴隷状態に仕向けてしまうことである．このようなことが「学問の探究のうちには，どんなに多くの危険が，どんなに多くの誤った道があることだろう」[34]（傍点筆者）と J-J Rousseau を言わせたのである．しかし我々はまたローマ人が美徳を備えていた時代が「貧困と無知の時代」[35]であったことから，J-J Rousseau が「無知」そのものに

積極的な意義をもたせたものではなかったことも念頭におく必要があろう．それは文明の美名の下におおいかくされた奢侈と頽廃の「奴隷状態」になるよりも，そうした文明には無縁なほど消極的態度の方がまだしも人間的であるということへの示唆にほかならないのであり，未開社会への aspiration という意味での「無知」を説くことでもないのである．「本能のなかにだけ」に自然状態で生きるための必要性を備えていた未開人達には「お互いのあいだに，いかなる種類の道徳的関係もなく，確かな義務ももっていなかったので，善くも悪くもありえず，また悪徳も美徳ももっていなかった．」[36]．このような「無知」の状態がかえって真の人間社会の形成として積極的価値をもつものである．J-J Rousseau は原始人が人間本来の原型でもなければ，また人間の存在理由が何であるか，またその使命も知っていた．彼は人間社会の中から文化をとりのぞこうとしたのではない．J-J Rousseauの主張は社会に，とりわけ18世紀の社会の現状を考え，そこで最も忘れ去ってしまわれている人間に最も大切な徳性を復帰させようと試みたのであり，ましてやそこに古代人の再来を望んだものではなかった．しかしながら J-J Rousseau の「田園の美」ともいうべき，自然美への aspiration は彼を原始賛美へと仕向けた，と考えられないわけでもなかった．それほど J-J Rousseau の原始賛美なるものは宗教的色彩をおびたものであった．それが道徳というものに restoration されたと思われる．J-J Rousseau が理想国とした「思索することより行為」が先じていたスパルタを例にとってまで行為と実践とに与えた優位は，より特殊的には市民道徳を志向するなにものでもなかったと思われる．

Ⅳ　公　教　育　と　徳

J-J Rousseau にとって，スパルタは理想国であった．このようなスパルタの偉大さを J-J Rousseau は「道徳を備えた市民」に求めたのである．ではスパルタ市民の「徳性」は一体何によって支えられていたのだろうか．それはいわゆるスパルタ式教育にこそあったろうと思われる．（上述した社会的道徳もここに起因する）「古代人の生活慣習を省察したことのある人たちはみな，かれらと現代人の最もはっきりした違いとなっているかの肉体と魂の強靱さは，体育によって鍛えたおかげだとしている．」[37]ここにおいて「古代人」とは初期ペルシア人，古典古代（ギリシア，ローマ），古代エジプト，ゲルマン古代などを指すのであろうが，特にスパルタにおいては「――スパルタの法律が市民の子供たちに対してしたのと同じことを行なう，すなわち自然はりっぱな体格の人たちを強く頑丈にし」[38]他のすべての人を滅ぼしてしまうのである．（スパルタにおいては義務教育制度が確立されており，体育は国の手で行なわれていた．）「まず腕白小僧を作らなければ賢い人間を作ることはけっしておよびもつくまい．それがスパルタの教育法であった．書物にへばりつかせるかわりに，かれらはまず食物を盗みとることを教えることからはじめたものだ．そのためにスパルタ人は大きくなって粗野な人間になったろうか？　かれらの当意即妙の才と力量を知らぬ者が誰かあろう？　いつも打ち勝つように仕込まれていたかれらは，どんな種類の戦いにでも敵をやりこめたものだ．そこでおしゃべり好きのアテナイ人は，スパルタ人の突撃をおなじほどに，その弁舌をも恐れたものだ．」[39]アテネが学問と芸術によって頽廃してしまったことまで持ち出してスパルタの美徳を賛美する J-J Rousseau の根拠はどこにあったのだろうか．それはスパルタで行なわれた公教育理念が，J-J Rousseau の理想に近かったにほかならないと思われる．J-J Rousseau の公教育理念は「祖国愛」による徳を形成することにあったのである．スパルタにおいて，公教育の対象は男女の区別はなかった．「スパルタの娘たちは，男の子と同じように，戦争ごっこをして身体をきたえた．それは戦争に出るためではなく，他日戦争の困苦にも堪え得る男子をもうけるため」[40]であり，剛健偉大な魂をもつ女市民たらしめるためであった．しかも彼女らは粗野な体操の悪い結果の補いをつけるのにふさわしい見事な光景を提供するような一面もあったのである．このようなスパルタの公教育に引かれた J-J Rousseau が「エミール」において「公教育というものは，現在では，もはやありえないし，また，すでにありえないものになっている．なぜならもはや祖国はなくなったのだから，市民もあるはずがないからだ」[41]，だから「祖国」と「市民」という二語は現代語から抹殺されなければならないと公教育を否定する時，それは absolute negation を意味するものではなく，全教育の a precondition である「祖国」が喪失したときという conditional negation である．J-J Rousseau がスパルタを理想国とみたのは，スパルタにおいて個人教育以上に公教育が優先していたからであると思われる．では民約論的社会において，公教育が私教育に優先する理由はどこにあったのだろうか．それは契約社会と自然社会の相違からくるものにほかならないと思われる．J-J Rousseauの公教育論の特長は「祖国愛」による徳の形成にこそあったろう．「公教育によって，早くから若い市民をして，そのすべての熱情を祖国愛に，すべてのかれらの意志を一般意志に集中することを教え，そしてそれによってすべての徳を，きわめて偉大な対象にまで高められた人間の心を，高めうる限りの点にまで高めることを教えうるのである．」[42]．このように J-J Rousseau は「祖国愛」を通して徳の形成を公教育に期したのであ

る．では J-J Rousseau の公教育は具体的にはどのように展開されていくのだろうか．「わたしたちは生きることをはじめると同時に学びはじめる」[43]というように J-J Rousseau の公教育は，誕生即教育であり「子供は眼をひらくとともに祖国をみなければならない．そして死ぬまで祖国以外のものをみてはならない．すべての真の共和国市民は，母の乳とともに祖国の愛情，すなわち法と自由の愛情を吸飲した．この愛情が，かれの全人格を形成する．かれは祖国以外をみない．かれは祖国のためにしか生活しない．かれは一人になるや否やもはや何ものでもなくなる．祖国をはなれるや否や，かれはもはや存在の意味を失う．もし死なないのであれば，かれは死ぬよりももっと悪い存在になってしまう．[44]」このような J-J Rousseau の考えは市民として傾向的にも，passion にも愛国者を形成しようとしたのである．では彼の「教育観」の foundation となるものは何であったろうか．それはもはや「自然人」(I'homme naturel) の教育ではなくて，統制の下での国民教育であった．「エミール」においては公教育は否定されたが，全体の精神は全く別問題であつた．「家庭教育を好み，自分の好むままに子供を教育しようとする両親も，体育競技には子供達を出席させねばならない．子供たちの知育 (instruction) は，家庭教育あるいは私教育を利用しても差しつかえない．しかし公的行事として行なわれる体育競技 (exercise corporels et jeux) には常にすべての子供たちが等しく参加しなければならない．[45]」J-J Rousseau によれば知識教育は私教育に委ねながら，体育競技だけはなぜ全員参加の義務を要求したのであろうか．別言すれば，J-J Rousseau は体育競技にどのような教育的効果を期待したのであろうか．「肉体は，精神の命に従えるだけ強壮であることが必要だ．よい従者は強壮でなければならないからだ．放恣・無節制はあらゆる情念をかきたてるものと私は承知している．そしてまた時のたつにつれて肉体を衰弱させるものでもある．禁欲，断食もこれと正反対の理由によってしばしば同じ結果をうむ．肉体は，弱ければ弱いほど命令する．逆に強ければ強いほど，服従するものだ．あらゆる肉体的な情念は柔軟な肉体に宿る．[45]」しかしこのような J-J Rousseau の体育競技への期待は，「無知の徳」という消極的なものにとどまらなかった．体育競技の目的は単に子供たちの身体を強壮し，敏捷にするような健康的側面からだけでなく，「早くから導法精神，平等観，同胞愛，競争心を体得させ，またかれらを同胞のみているところでの生活と，公の是認を切望することはならす」[47]ことであった．このことは体育競技を通して市民に不可欠の「祖国愛」の精神を実践的に培うことを試みたものにほかならない．別言すれば，体育競技を通して個人の恣意を社会共通の意志に合致させる――このようにして徳の形成を試みたのである．[48]

J-J Rousseau はこの意味においても，体育競技を「強健，健全な身体」の形成に役立つばかりか，徳を形成する上でもきわめて有効であり「教育の中でもっとも重要な部分」であるとし高く評価しているが，このような J-J Rousseau の考えは個人教育よりも公教育に重点をおいていたスパルタに大いに影響を受けていたことは言うまでもない．さて，J-J Rousseau の体育論が，彼の著「エミール」に示した消極教育論の原則が，公教育への適用であったことが十分理解できると思われる．又学問・芸術論」で無分別な教育が子供から「祖国愛」ということばを消してしまっただけでなく「大度量，公正，節制，慈悲，勇気」[49]ということばまで彼らが何であるかを忘れさせた，としている．「私は自分の生徒が球遊びをして時間を過したほうがよいと思う．すくなくともそれによって身体がいっそう丈夫になるだろうから．[50]」（傍点筆者）子供には何か仕事をさせておかなければならない．J-J Rousseau は悪徳防止の有効的手段として体育競技を用いたが，これは彼の目標からすれば消極的かつ積極的方法であったろう．「悪徳防止の手段は自分の席に無理強いに留まらせるということだけで嫌いになってしまう退屈な学習によってではなく，成長するにつれて身体が求める活動欲求を満足させて，かれらに喜びを与える体育競技によって，子供たちに息つくひまも与えないようにすることである．[51]」このことは「人生でも最も危険な期間は，生まれてから12才までの期間」であり，社会のいろいろな過誤や悪徳に染まりはじめるのもこのころである．しかもそれらを根絶する方法を何らもたない時期でもあるから「精神がそのすべての機能を完備するに至るまでは，彼らの精神を用いることは，何一つかれらにさせないようにしなくてはなるまい．[52]」それゆえ「初期の教育は純粋に消極的」でなければならない．J-J Rousseau にすれば「初期の教育」は美徳や真理を教えることではなく，「悪徳から，過誤から精神」を守ってやることであった．我々はここに J-J Rousseau の公教育論が「エミール」を具体化したものであったことが推察されるであろう．

V J-J Rousseau の身体観

先述したように，J-J Rousseau の公教育論が「エミール」の具体化にほかならないとするのであれば，彼の「エミール」における消極論というべきものがいかなるものであったろうか．ここで J-J Rousseau の「身体観」だけをとり出して，私観をのべてみようと思う．（しかしここで J-J Rousseau の教育論，又それが身

体教育論であってもただそれだけについて語ることが不可能な意味をもっていることも理解していなければならないと思う．）J-J Rousseau の「教育論」が古代史，古代人をふまえながらも，それが還元，復帰を意味するものでもなければ，現実からの逃避でもないことは言うまでもない．それは J-J Rousseau の「歴史観」にもみられるように，個人が第一義的なものであるが，それにもまして社会も第一義的なものであった．――ということは個人主義とも社会主義とも言えぬ，J-J Rousseau 独自の立場から「教育論」が展開されているのである．

さて，J-J Rousseau の教育の目的が「真の市民」を育成することにあったことは言うまでもない．しかるに J-J Rousseau がもはや「祖国はなくなったのだから市民もあるはずがないからだ．」[53]というのは先述したように coditional negation にすぎないのである．「創造主の手から出る時は事物は何でもよくできているのであるが，人間の手にわたるとなんでもだめになってしまう．」[54]このような考えは18世紀社会への批判ばかりか，J-J Rousseau の公教育への guiding を意味するものであろう．又それは公教育を具体化していくための suggestion ともなったのである．J-J Rousseau の生きた時代が「学問や芸術」の発展で，人間本来の姿を見失なう寸前におかれていた．J-J Rousseau はこのような社会を憂えて現体制を改革するためにも人間の改革をと願ったのである．その最も理想となしたのがスパルタの社会であり，その国で行なわれていたような教育であった．さて，我々は J-J Rousseau の「身体観」がスパルタ，近代ではモンテーニュ，ロックのそれに影響を受けていたことをみることができる．スパルタの身体教育が厳格な訓練主義にあったことはいうまでもなく，モンテーニュ，ロックにしても，身体教育に関しては徹底的な訓練主義をみることができる．「古代人を現代人と区別したのが肉体と魂の強靱さからくるものである．」[55]という説に対して，モンテーニュは「手をかえ品をかえ」支持している．J-J Rousseau は言う，「モンテーニュは「子供の教育」を語る時になると，子供の魂を強固にするには筋肉を強くせねばならない．」と．それには「鍛練の苦しさなどものの数ではないようにしなければならない．」[56]．このような考えは「賢明なロック，りっぱなロラン，博識のフルーリ，学者のド・クルーザなど，ほかのことでは互いに非常に意見の違っているかれらも，子供の身体を大いに鍛えねばならないというこの点だけはみんな意見が一致している．それはかれらの教えの中で最も正しい教えであるが，現存もそして将来も，いつも一番なおざりにされる教えである．」[57]．さて，J-J Rousseau の「身体観」の特長がどこにあったろうか．それは公教育でみられたように体育競技が悪徳防止の有効手段として用いられたような，いわば二義的な見方でしか受けとられなかったとは別に，J-J Rousseauの「身体観」についてはもっと積極的な意義を見つけ出すことも可能である．それは何よりも「子供の発見」であり，「あてにならぬ未来のために現在を犠牲にする教育，子供をあらゆる種類の鎖でしばりつけて，絶対に享受できないと思っておかねばならぬような，いつともはかり知れぬ遠い未来の幸福に備えて，まず子供を不幸にすることからはじめるという世の残酷無慈悲な教育については，いったいこれをどう解したらよいものだろうか．」[58]，というようにこれは現代社会への批判と同時に，子供に課されるべき教育が，本来何であるかを問うものでもあろう．「子供の幸福」とは一体何であろうか．J-J Rousseau の大人への問いかけは続けられる．「人類は事物の秩序のうちにその立場をもっているものであるから」[59]（傍点筆者）当然，子供も人間の生涯の秩序のうちに立場というものをもっているものである．だから「大人は大人の座で，子供は子供の座で考えねばならない．」[6']．さて，このように J-J Rousseau が「子供の発見」をみたところで，では彼は子供の教育についてどのように考えていたであろうか．それには理性の発達が完全でない子供にとって，訓戒を教えこむことより実際的な訓練にこそあった．「プラトンは非常にきびしい人と思われているが，「国家」の中では子供たちを育てるのはもっぱら祭や遊戯や歌や娯楽の中でしている．かれは，子供たちに遊ぶことを十分教えこめば能事終れりとしているのだといえそうなくらいである．」[61]．J-J Rousseau がプラトンに影響を受けたことは確かであろう．しかもそれは教育だけに限られたものではなかったろう．「子供を愛せよ，子供の遊び，子供のよろこび，子供の愛すべき本能を助長せよ」[62]，とJ-J Rousseau も子供には「子供は本能」にだけ従うようにすすめているのである．このような J-J Rousseau の考えは，子供の発達段階をふまえながらも，それが現代社会における人間を改革しうるというような意味も含まれてくるのである．J-J Rousseau の「身体観」がただ「身体活動」にだけ意義をもたせたものではないことが明らかになってくる．J-J Rousseau にとって，子供時代の身体活動で得られたものは社会に還元されなければならなかったのである．

結　語

以上，J-J Rousseau の古代史評価を中心に彼の体育思想の根源ともなったスパルタについてのべてきたが，J-J Rousseau の体育思想を展開するには，彼の作品の一部だけをとりだして云々することはできない．それは J-J Rousseau が非常に独創的な思想の持ち主であり，

又文化を広い領域で述べている事実から，それを無視しては本質からはなれてしまうことになると思われる．

J-J Rousseau は歴史家ではなかった．しかし彼の作品のいたるところに歴史的叙述が散在していたことも確かである．J-J Rousseau が歴史を問題にしはじめるのは教育的価値を判断する時であり，それには道徳が評価基準となった．J-J Rousseau がスパルタ崇拝に傾注したのも道徳にこそあったと思われる．

参考・引用文献

(1) エミール（抄）P258　永杉喜輔，宮本文好，押村襄共訳玉川大学版（世界教育宝典）
(2) 学問・芸術論（抄）　P71　中央公論（世界の名著）平岡昇，小林善彦，井上幸治，戸部松実共訳
(3) エミール　P256
(4) Ibid　P257
(5) Ibid　P257
(6) Ibid　P256
(7) Ibid　P258
(8) Ibid　P258
(9) Ibid　P256
(10) Ibid　P256
(11) Ibid　P256
(12) Ibid　P257
(13) Ibid　P257～258
(14) Ibid　P255
(15) Ibid　P257
(16) Ibid　P257
(17) Ibid　P158
(18) Ibid　P257
(19) 学問・芸術論　P86
(20) Ibid　P 90
(21) Ibid　P 87
(22) Ibid　P 75
(23) Ibid　P 74
(24) Ibid　P 94
(25) 学問・芸術論　P70
(26) Ibid　P 70
(27) Ibid　P 76
(28) 学問・芸術論　P71
(29) Ibid　P 71
(30) 学問・芸術論　P73
(31) Ibid　P74
(32) エミール　P253
(33) 学問・芸術論　P66
(34) Ibid　P 80
(35) Ibid　P 72
(36) 人間不平等起源論　P140
(37) エミール
(38) 人間不平等起源論　P122
(39) Ibid　P122
(40) エミール　401
(41) Ibid　P17～18
(42) 政治経済論　河野健二訳　岩波文庫　P70
(43) エミール　P19
(44) フランス革命期における公教育制度の成立過程，松島鈞　亜紀書房　P31
(45) Ibid　P 32
(46) エミール　P 34
(47) フランス革命期における公教育制度の成立過程　P32
(48) Ibid　P 32
(49) 学問・芸術論　P88
(50) Ibid　P 88
(51) フランス革命期における公教育制度の成立過程　P33
(52) エミール　P 82
(53) Ibid　P18～19
(54) Ibid　P 13
(55) Ibid　P123
(56) Ibid　P123
(57) Ibid　P123
(58) Ibid　P 63
(59) Ibid　P 64
(60) Ibid　P 64
(61) Ibid　P 99
(62) Ibid　P 63

そ の 他

1. 歴史の見方　茅野良男　紀伊国屋新書
2. 古典ギリシア　高津春繁　筑摩書房
3. ルソー研究　桑原武夫　岩波書店
4. ヘロドトス・トゥキュディデス　歴史（抄）戦史（抄）松平千秋，久保正彰訳　中央公論(世界の名著)
5. フランス革命の研究　桑原武夫　岩波書店
6. 教育生命の原理　福島政雄　福村出版
7. オリンピック　斎藤正躬　岩波書店
8. ジャン・ジャク・ルソーの史学史的研究　酒井三郎　小川出版
9. ヒューマニズムの教育思想　荘司邪子　刀江書院

10. ギリシアとローマ
村川堅太郎　中央公論（世界の歴史2）

11. *Homo Luders*. transl. by Hull, Poutledge & Kegan Paul Ltd, London 1949

12. *The waning of the middle age*. Penguin Books Ltd., Harmond sworth 1955

13. *Philosophy of education in historical perspective*.

14. The question of J-J Rousseau … Cassirer indiana University Press.